2022年5月29日（日）主日朝礼拝説教

『やがてわれらも、み国に昇り』井上隆晶牧師
使徒言行録1章3〜11節、マルコ福音書16章14〜20節

❶【神の右の座】
キリストが復活して40日目に、主は天にお帰りになりました。それを昇天といいます。昇天というと日本では、死んだ人の魂が天国に昇ることだと思っている人がいますが、キリストの昇天はそれではありません。旧約聖書の中にもエリヤという預言者が嵐の中を火の車によって天に上って行った（列王記下 2：11）ことが書かれていますが、エリヤは神の右の座には座っていません。葬式で「召天」という言葉を使いますが、それは天国に召されるという意味です。キリストの「昇天」とは、彼が地上での救いの業を終えられ、もともとおられた神の座に戻られたことを言います。
使徒言行録に「**イエスは弟子たちが見ているうちに、天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった。**」（使徒 1：10）とあります。主が弟子たちに天に昇る姿を見せられたのは、御自分が神であることを教えるためでした。マルコ福音書には「**主イエスは、弟子たちに話した後、天に上げられ、神の右の座に着かれた。**」（マルコ16：19）とあり、使徒信条でも「天にのぼり、全能の父なる神の右に座したまえり」と告白されています。誰も神様の右の座にイエス様が着かれたのを見た者はいませんから、これは教会の信仰告白です。イエス様が神の右の座に座ったというのは、イエス様は父なる神様と同座なる神であり、神の右に座ることは、裁きの全権を委ねられていることを意味しています。そのことはイエス様自身もいっておられたことです。「**父は誰をも裁かず、裁きは一切人に任せておられる。**」（ヨハネ 5：22）これはユダヤ教やイスラム教では決してありえないことです。彼らのメシアは人であって神ではないからです。私たちの礼拝堂には、キリストが神として父なる神の右に座しておられる絵があります。私たちはこの絵を仰ぎ、天上におられる三位一体の神に祈るのです。

❷【キリストは見えないけれど私たちの内におられ、又教会という姿でおられる】
天使は、弟子たちにいいました。「**ガリラヤの人たち、なぜ、天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。**」（11節）天使は、弟子たちにこういったのです。「イエス様が自分たちから遠くに去ってしまったと悲しんではならない。必ずイエス様は戻って来られるから安心しなさい。」これは世の終わりの再臨の事をいっているのでしょうが、それだけではないと思います。イエス様は「**私を愛する人は、私の言葉を守る。私の父はその人を愛され、父と私とはその人のところに行き、一緒に住む**」（ヨハネ 14：23）と言われました。それは

聖霊が降ることによって実現しました。三位一体の神は分離できないので、聖霊がその人に臨む時、御子と御父も霊的に共に来られます。またパウロも「**あなた方は自分が神の神殿であって、神の霊が自分たちの内に住んでいることを知らないのですか。**」（Ｉコリント 3：16）と言っています。今度は聖霊と共に弟子たちの中に住み、弟子たちの霊と一体になって、前よりも一層近く共にいてくださるのです。私たちは外側は一人に見えても、実は二人（いや四人）なのです。イエス様は見えないだけで、私たちの内におられます。しかし信者さんが神の神殿となっただけでなく、その信者が二～三人集まる場にキリストは現れます。それが教会です。教会はキリストの体と言われます。教会にはキリストの霊が満ち満ちています。教会に来るとキリストを思い出す為のあらゆるものがあります。聖書、聖餐、讃美歌、イコン、十字架、祭壇、ともし火、香、祈り、祭服。礼拝堂で賛美し、聖書を読み、祈祷を唱えるとキリストが現れます。それを通して、自分の中にキリストが住んでおられる事を体感できるのです。こうして「**私は世の終わりまでいつもあなたがたと共にいる**」（マタイ 28：20）が実現しました。

❸【キリストの昇天は、あなたの昇天であること】

先ほど言ったように、父と子と聖霊の三位一体は決して分離しませんから、キリストが天から降り人間の肉体を取って地上を歩いておられた時も、神性においては父から離れず天におられました。だから主が昇天されたといっても、もともと神性は父なる神と共に天におられたのですから、正確に言うなら、主はこの日、受け取られた人間性を天に引き上げられ、父なる神の右に座らせたということになるのです。昔の祈祷文にもこう書かれています。

●「キリストよ、あなたは父のふところから離れず、人になって地上の者と共に住まい、今オリーブ山から栄光のうちに天に昇り、われらの堕落した人間性を憐れみによって昇らせ、父と共に宝座に座らせました。」

これこそキリストがなされた救いの目的でした。すなわち、人間を天に引き上げるために、この方は地に降られたのです。だからキリストの昇天はあなたの昇天です。洗礼を受けてあなたはキリストの体となりました。頭であるキリストが天に上がる時、その肢体であるあなたも共に上げられたのです。彼はもともとおられた所に昇るのですが、私たちは恵みによって引き上げられたのです。昇天はキリストの救いの最後の業を教えています。よく「十字架によって救われた」という人がいますが、それは救いの一部に過ぎません。**キリストの受肉、十字架、復活、昇天というすべての過程によって人間全体が救われたのです。キリストの受肉は救いの始まりであり、十字架によって罪を取り除き、復活によって死を取り除き、昇天によって人間性を天に引き上げ、完全に人間の救いが完成したのです。この一体の神秘によって人の救いは完成します。**私たちは自分の力では、天国に昇れませんが、降ってこられた方、すなわちキリストと一つに結ばれ、彼の肩にしっかりと担がれ、キリストによって神の国に連れてゆかれるのです。キリスト

教の救いって、ただ罪が赦されるだけではないのです。神様のところまで高く私たちを引き上げる、神の元に帰るところまでが救いなのです。

●以前、淀川キリスト教病院こどもホスピス病棟の話をしたことがありますが、そこに、人工呼吸器をつけていたり、いつ発作が起きるか分からなかったり、胃ろうの管理や痰の吸引などの日常的なケアが必要な「難病の子供たち」が一時的に入院してきます。それは彼らの家族を休ませるためです。でも、この病棟にはいつも誰かの笑い声がしているというのです。そこのスタッフたちが、子供たちの何気ない仕草や、笑い顔などに感動し、嬉しくなり、笑うからです。そこのチャプレンをしている久保のどかさんはこう言っています。「いつも思うのですが、私みたいな者がこんなに幸せな気持ちになるのだから、神様はどんな気持ちでこの子供たちを見つめておられるのだろう。この子たちは神様にとって、私が想像もできないくらいの喜びなのだろうな、ということです。…子どもたちと一緒に過ごすなかで私が教えてもらっていることの一つは、〝自分に与えられたいのちを生きることは神様への賛美だ〟ということです。難病の子供たちの「生きる」には、困難がたくさんあります。ですが、神様に「生きよ」と願われ、与えられたいのちを生きる彼らは、神様の喜びであり、神様と共にそのいのちの道を歩んでいると私は思っています。」

藤木正三牧師は「能力は置かれたところに影響されますけれども、命は置かれたところに影響されません。…感謝して受け入れていけば、どんなところででも輝くのが命だからです。」と書いています。人は「自分の力で、自分の命を生きている」と思っていますが、実はそうではなく、命はすべて神のものなのであって、人も動物も植物も神によって毎日生かされているのです。だから生かされている日々というのは非常に宗教的な、神秘的なことなのです。難病の子供たちは、自分では生きれません。だからこそ、彼らを生かしている神を無性に感じるのだと思います。それだけでなく、子供たちはその命を感謝し、周りの人の愛を喜び、自分の定めを受け入れているので、彼らの命が輝いているのだと思います。
讃美歌 337 の 5 番に「やがてわれらも、み国に昇り」とあり、讃美歌 226 の 1 番に「われもいつの日かみ国に昇らん」とあり、確かにいつの日か私たちも天に昇りますが、実は日毎に、私たちの魂は天に昇るかのように喜ぶことができるのです。つまり命が輝くことが出来るのです。私たちの神は、私たちを救おうとして今日も激しく働らいておられるからです。神によって創造され、神によって洗われ、神と一体となって歩み、神によって高く上げられ、神によって永遠に生きる者となったのが私たちです。神が働かれない日々など、私の生涯の中で一日たりともなかったのです。今日もその神の働き、命のエネルギーの中を生き、動き、存在させられているのです。そのように私たちに働いて下さっている神に感謝して、喜んで日々を過ごしましょう。